Program

イベール：
バッカナール

プーランク：
バレエ組曲「牝鹿」

ベルリオーズ：
幻想交響曲

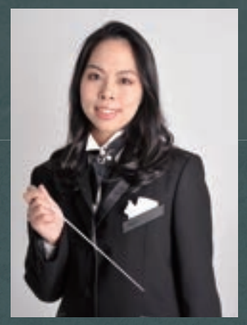
湯川紘恵 指揮者

Hiroe Yukawa, conductor

東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。同大学大学院音楽研究科指揮専攻修了。これまでに指揮を高関健、山下一史、尾高忠明、田中良和の各氏に師事。ヨルマ・パヌラ氏、リッカルド・ムーティ氏、シャーン・エドワーズ氏などのマスタークラスを受講。リッカルド・ムーティintroduces若い音楽家による《マクベス》や英国ロイヤルオペラハウスにてJPYAP主催マスタークラスの公演《椿姫》、N響室内楽演奏会などを指揮する。

管弦楽公演、オペラ公演のみならず、バレエ公演の指揮にも取り組み、これまで牧阿佐美バレヱ団や東京シティーバレエ団と共演。《くるみ割り人形》《白鳥の湖》《眠れる森の美女》《三銃士》などを指揮した。

2021年9月よりNHK交響楽団にてパーヴォ・ヤルヴィ氏のアシスタントを務め、2022年1月より指揮研究員として同団の公演に携わる。2023年11月にはフェドセーエフ氏の代役を急遽務めN響定期公演を指揮し話題を集めた。



フライハイト交響楽団

Freiheit Sinfonie Orchester

当団は、1996年4月、東京都内および近郊の大学オーケストラに所属している学生、及び卒業した社会人が中心となり音楽文化の交流を深める目的で結成されました。毎年2回の定期演奏会を中心に、古典ロマン派からアマチュアでは取り上げる機会の少ない難易度の高いプログラムまで、様々な時代や編成の楽曲に意欲的に挑戦しています。

当初はJMJ（青少年日本音楽連合）で活動していたメンバーが中心でしたが、年を重ねて幅広い年齢層、様々なバックボーンや経験を持つメンバーが増えた現在も、結成以来変わらぬ音楽への情熱と団員間の厚い信頼をベースに、常に聴衆を魅了する質の高い演奏を実現すべく、アンサンブル力や表現力の向上に取り組んでいます。

フライハイト交響楽団のホームページ

今後の演奏会情報、またこれまでの活動実績等がご覧いただけます。

http://freiheit-sinfonie-orchester.s3-website-ap-northeast-1.amazonaws.com

Program Note

ジャック・フランソワ・アントワーヌ・イベール（1890-1962年）

バッカナール

今宵の演奏会のオープニング曲の「バッカナール」を作曲したイベールは1890年パリに生まれ、パリ音楽院で音楽を学び第一次世界大戦中は海軍士官として従軍した経歴を持ちます。管弦楽曲や室内楽曲だけでなくオペラ、バレエ、映画音楽など演劇的要素を含むジャンルの楽曲を多く残しました。

本作品は英国放送協会の委託作品として作曲されたもので「バッカナール」とは古代ギリシアに起源する、酒と収穫の神バッカスを祀る祝祭のことを意味し、酒盛りの踊りのための曲と言えます。冒頭の歯切れのよい伴奏に乗り金管が勇壮な「テーマA」を演奏します。このテーマは盛り上がりと共に曲中に3回登場しますのでカウントしてみてください。冒頭のテーマの後、モチーフがレイヤーのように重ねられる「テーマB」が金管により演奏され、音楽が盛り上がった先に再び「テーマA」が戻ってきます。「テーマA」が一段落すると、気高く大胆なダンスのリズムを弦楽器が奏でます。その後「テーマB」に続き「テーマA」が再現され、盛り上がって終わります。

初めて聞いた時「とにかく金管が格好良い！」という爽快な印象を持ちました。弦楽器が一丸となり金管に合いの手を入れ、酒盛りの踊りを表現する様子をお楽しみください。

（Vn　藤代美有紀）

フランシス・プーランク（1899-1963年）

バレエ組曲「牝鹿」

「牝鹿」は全1幕9曲からなる合唱付きバレエで1924年の初演。若者たちの偶然の出会いを描き、牝鹿は「若い娘」を指します。初演の15年後に作曲者自身の手で管弦楽組曲となりました。

1. Rondeau - 非常に遅い3小節の導入部に続き、力強いロンドーに突入します。トランペットの軽やかなテーマが曲を貫いています。Très calme「非常に穏やか」な中間部では物悲しくも滑らかな曲想を提示、最後はロンドーのテーマで騒々しく締めくくります。

2. Adagietto - メランコリックなアダージェットにプーランクの作曲技法が表れています。オーボエによる哀愁あふれたテーマは、時折力強い音の羅列で中断されつつ全曲を支配します。

3. Rag-Mazurka - ポーランドの舞曲を名乗りつつ高速かつ拍子が次々と変化するのでバレエでは遅めに演奏するようです。中間部がジャズっぽいのは1920年代のパリの流行を反映しているとか。

4. Andantino - むしろアレグレット的。穏やかなテーマと騒々しいパッセージが行ったり来たりします。終結に向かい金管楽器が主導権を握り騒々しくなるところ、最後は木管のアルペジオと低弦の和音でTrès calme、穏やかに終結。

5. Final - フィナーレに相応しい速い曲。1曲目のロンドーが回想された直後に短いゆったりした中間部を置き、テンポは再び上がって最初のテーマを高速で回顧して締めくくります。

滑らかなフレージングによる管楽器の活躍がプーランクの聴きどころ。管楽器の名手が多いフライハイト交響楽団の「牝鹿」お楽しみあれ。

（Vn 大越智）

エクトール・ベルリオーズ（1803-1869年）

幻想交響曲 Op.14

オールフランスプログラムの最後の曲は、ベルリオーズの代表作として有名な「幻想交響曲」です。この曲は、ベルリオーズがまだ26歳という若さで作曲した最初の交響曲であり、ロマン派の「標題音楽」の先駆けとなった曲です。

この曲は、「失恋した若い芸術家（ベルリオーズ自身）が、アヘン（麻薬）を飲んで自殺を図ったが、致死量に達しなかったために死にきれず、奇怪な幻夢を見る」という彼自身によって創作された物語に基づいて作曲されたものです。

ベートーヴェンが亡くなったわずか3年後に完成したこの曲は、衝撃的な物語に加え、それまでの古典的な音楽と比べ、格段に大きい楽器編成と斬新な響きで、当時の人々にはとても刺激的だったのではないかと思います。

第1楽章　「夢ー情熱」
ゆっくりとした序奏は、「若い芸術家」の不安と焦燥を感じさせ、恋心を奪われた気持ちを表しています。
その後「イデー・フィクス」（固定観念）とベルリオーズが定義した、「若い芸術家」が思いを寄せる女性の姿を表す主題に移ります。その後も熱烈な愛、憂鬱な気持ちと様々に変化し、最後はヴァイオリンによる宗教的な「イデー・フィクス」で、神に祈りを捧げるまで「恋人」を想っている様子を表して締めくくられます。
この「イデー・フィクス」は、全楽章に渡って姿を変えて現れてきますので、探してみてください。

第2楽章　「舞踏会」
舞踏会で「恋人」がワルツを踊っています。「若い芸術家」は「恋人」を見つけては、舞踏会の雑踏の中で見失ってしまいます。その様子を、中間部の木管楽器による「イデー・フィクス」で表しています。最後にクラリネットによる「イデー・フィクス」が現れると、舞踏会は激しく熱狂的に締めくくられます。

第3楽章　「野の風景」
「若い芸術家」は孤独の中、静かで穏やかな時間を過ごしていますが、だんだんと寂しさ、不安が溢れてきます。そんな中、「恋人」を思い出し、また「イデー・フィクス」が現れ、心のざわつきが高まっていきます。やがて落ち着きを取り戻すと、穏やかな時間が戻ってきますが、4台のティンパニによって遠くの雷鳴が聞こえてきて、どことなく不安な様子で締めくくられます。

第4楽章　「断頭台への行進」
「若い芸術家」は、夢の中で「恋人」を殺してしまい、死刑を宣告され断頭台へ連れていかれます。その様子は行進曲で表され、暗く重々しい足取りが続いていきます。
ギロチン処刑される瞬間に、「恋人」のことを思い出し、「イデー・フィクス」がほんの一瞬現れますが、その想いを断ち切られるかのように首を切り落とされてしまいます。弦楽器の最後のピッツィカートは、首が転がっている様子を表しており、観衆の嵐のような喝采によって締めくくられます。

第5楽章　「サバトの夜の夢」
「若い芸術家」は、夢の中で目覚めますが、まだ夢の中にいて、サバト（魔女の饗宴）で自分の葬儀が行われていることを認識します。幽霊、魔法使い、ありとあらゆる化け物が集まっています。
薄気味悪い音、うめき声、ケタケタ笑う声が聞こえてきます。
「イデー・フィクス」は、かつては「恋人」を想う美しい音楽でしたが、その美しさはなくグロテスクに変わっています。夢の中で殺した「恋人」も魔女として薄気味悪く踊っているようです。
その後、地獄の鐘が鳴り、グレゴリア聖歌、レクイエムの「怒りの日」と続き、激しく熱狂的に締めくくられます。

オールフランスプログラムをどうぞ最後までお楽しみください。

（Vn　佐々木陽介）